

# 第4章 長岡京市の歴史文化の特徴

## 1. 歴史文化の抽出と整理

文化財は、当該地域の社会的状況、自然的及び地理的環境、歴史的背景のなかで生み出され、守り伝えられたことで存在しています。そのため、文化財の価値や魅力を正しく把握し、保存・活用を図るには、それを包摂する歴史文化への理解が欠かせません。

そこで、これまで確認してきた長岡京市の概要と文化財の特徴から導き出した歴史的なトピック、及び市民アンケートや市民ワークショップで収集したキーワードを用いて文化財等を時代毎に整理すると、図4-1のようになり、本市域の歴史文化の特徴として、7つのテーマを見出すことができました。次節では、各テーマにタイトルを付し、それぞれの歴史文化をストーリーとしてまとめました。なお、その内容や関連する文化財等には、重複するものもありますが、これらは相互に関係しつつ育まれてきた、本市の個性を示すものでもあります。



図4-1 長岡京市の歴史文化の抽出と整理

## 2. 7つの歴史文化

### (1) きわめて高い利便性！人とモノ、文化をつなぐ要衝の地

本市域を含む乙訓地方は、西山山地と桂川とに東西を画され、京都盆地と大阪平野とをつなぐ地域に位置する、古くから交通の要衝として人々が行き交う地域でした。

伊賀寺遺跡では、縄文時代の玉作りが確認され、北陸から山陰にかけて採集される、碧玉類を入手して加工していた様子がわかり、先史時代から日本海地域との交流が窺えます。神足遺跡でも弥生時代の玉作りが確認されており、原材料を他地域から入手し、加工していました。大阪府や滋賀県などから持ち込まれた土器も出土しており、盛んに交易していたことが知られます。

前近代社会では交通の主役は河川でしたが、伊賀寺遺跡が小泉川北側に広がることからわかるように、本市域においては小畑川・小泉川をはじめとする淀川水系がそれを担いました。奈良時代には丹波、山陰方面へ向かう山陰道や西国に通じる山陽道など、都から延びる官道が整備され、乙訓地方を通過し、陸上交通でも列島各地が結ばれました。

平安時代前期、平安京羅城門から南下する鳥羽作道と山崎とを繋ぎ、桂川右岸低地を斜めに直進する久我躰が敷設されます。当初は山陽道の一部として機能したようですが、江戸時代には衰退、現在その一部が農道や生活道路として残っています。

江戸時代になると、西国街道や丹波街道が賑わいを見せるようになりました。西国街道は、およそ山陽道を踏襲したとされ、豊臣秀吉によって朝鮮出兵を契機に整備されたと記録されます。京都の東寺口から西へ向かい、桂川を渡って久世から向日町、山崎を経て西宮で中国街道に接続する主要街道で、多くの往来があり、現在も石田家住宅や中野家住宅などの歴史的な建造物が残っています。石田家住宅は「神足ふれあい町家」として公開・運営、中野家住宅は飲食店に活用され、街道筋に商家が建ち並んだ、往時の様子を窺い知ることができます。丹波街道は、西国街道を調子八角で西へそれ、友岡から北上して八条ヶ池東堤を通り、西へ曲がって長法寺・粟生を経て、大枝の沓掛で山陰道に繋がる西山山麓の道で、周辺に点在する寺社への参詣者が多く行き来しました。また、丹波と淀川水系を結ぶ物流を担った道でもあり、路傍には参詣のための道標が、付近には佐藤家住宅・河合家住宅・田村家住宅が残され、街道筋の趣を今に伝えています。もちろん、街道を介した交通だけではなく、間道によって大山崎、島本(大阪府三島郡)方面や淀川の対岸、淀(京都市伏見区)や八幡(京都府八幡市)など左岸地域とも往来がありました。

近代には、昭和3年(1928)に新京阪鉄道長岡天神駅(現在の阪急電鉄長岡天神駅)、同6年(1931)に省線神足駅(現在の JR 長岡京駅)が設置され、戦後には戦前に敷設された産業道路が国道 171 号として、昭和 38 年(1963)開通の名神高速道路と合わせて整備されました。いずれも、西国街道と平行するかたちで淀川右岸に設けられたもので、これらを契機として本市域の近代化が推し進められ、長岡運動場や長岡競馬場など「長岡」を冠する大規模施設や企業、工場地帯、商業施設、銀行、文化・公共施設が次々と建設されました。こうした近代化に関わる文化財として、JR 沿線の七反田橋梁(神足六連橋)と老ヶ辻橋梁(老ヶ辻三連橋)が知られます。平成に入っても、本市域では京都縦貫自動車道が整備され、阪急電鉄との交差点には西山天王山駅が開設されるなど、交通利便性はさらに高まりました。

こうした交通の発展過程から、本市域では高度経済成長期以降、宅地開発が急速に進みます。その先駆けとなった梅が丘や泉が丘、高台といった長岡天神駅の南西に広がる住宅地は、阪急電鉄の大規模住宅開発によるもので、

### 要衝の地

1

- 河川・環境・鉄道、交通の結節点
- 長岡京市の歴史文化の基層



石田家住宅(神足ふれあい町家)と西国街道



大正末から昭和初期の田村家住宅と丹波街道

現在も良好な住宅地景観が形成されています。

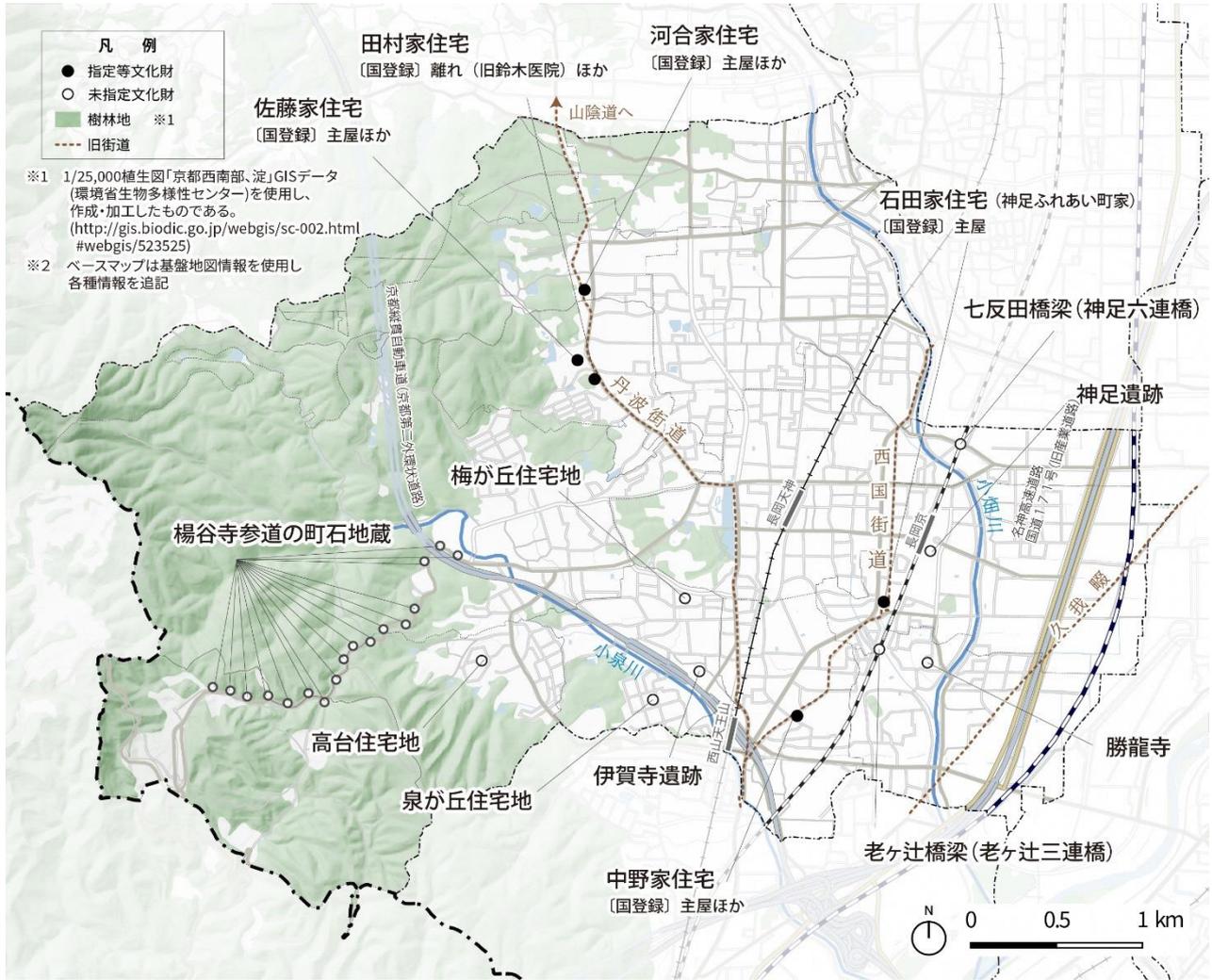


図4-2 「要衝の地」に関する文化財の位置図

名称	概要
○ 伊賀寺遺跡	集落跡。縄文時代の玉作りが確認でき、日本海地域との交流が窺える。
○ 神足遺跡	集落跡。弥生時代の石器生産が確認でき、乙訓地域を代表する中核拠点。
○ 久我礮	鳥羽の作り道と山崎とを結ぶ。桂川西岸低地を斜めに直進する道。
○ 勝龍寺	真言宗の寺院。室町時代に守護勢力の拠点になり、勝龍寺城が築かれる。
○ 西国街道	東寺口から向日町、山崎を経て西宮へ至る道。一里塚の地名が残る。
● 石田家住宅	主屋は切妻造・棧瓦葺、2階建ての民家。土蔵解体で見つかった棟札から江戸末期と推定。
● 中野家住宅	主屋は切妻造・棧瓦葺、2階建ての民家。北村伝兵衛による近代茶室「皎庵」がある。
○ 丹波街道	西国街道を調子八角で西へそれ、大枝の沓掛で山陰道に繋がる道。
● 佐藤家住宅	主屋は近代初頭の大型建築。農家の屋敷構えで伝統的な集落景観を構成。
● 河合家住宅	主屋は切妻造・棧瓦葺の民家。西・南・東面に深い下屋庇が付属する。
● 田村家住宅	離れは開放的な和風住宅で旧鈴木医院。茶室「任無庵」がある。
○ 楊谷寺参道の町石地蔵	楊谷寺参道で1町(約110m)毎に建てられた、石仏の標石。
○ 七反田橋梁(神足六連橋)	明治初期開通の東海道線に設けられた、煉瓦造の6連アーチ橋。
○ 老ヶ辻橋梁(老ヶ辻三連橋)	明治初期開通の東海道線に設けられた、煉瓦造の3連アーチ橋。
○ 梅が丘・泉が丘・高台住宅地	昭和30年代、阪急電鉄によって開発された住宅地。

●:指定等文化財 ○:未指定文化財

## (2) 巨大な古墳が出現！大王の息吹を体感

大王の息吹

2 

古墳時代は、日本列島各地に大小さまざまな古墳が築かれた期間で、3世紀後半から7世紀前半まで、約400年間続きました。古墳が築かれた地域は、近畿を中心とする緩やかな政治体制のなかに組み込まれていたと考えられ、本市域でも4世紀後半からその築造が確認できます。

本市域に所在する古墳・古墳群は、やや北部に偏って分布しています。最も古い首長墓の長法寺南原古墳は、西山山麓に立地し、その後平野部に今里車塚古墳や乙訓地方最大の恵解山古墳が、古墳時代後期に至って、井ノ内車塚古墳や今里大塚古墳などが築られました。また、西山山麓には大原古墳群などの群集墳、平野部には塚本古墳などのように、発掘調査で初めて確認された古墳・群集墳も分布しています。

5世紀中頃の恵解山古墳は桂川右岸の台地端に立地し、全長は約128mと推定され、周濠を含めると約180mに及びます。埋葬施設は明らかになっていませんが、後円部に竪穴式石室があったと考えられています。昭和55年(1980)の発掘調査で副葬品埋納施設が見つかり、約700点にのぼる鉄製武器が確認されました。こうした事例は全国的にも珍しいもので、被葬者が乙訓地方全体を支配した権力者であったとともに、中央政権がいかにこの地域を重要視したかがわかります。古墳は国指定史跡に、鉄製武器などの出土品は京都府指定有形文化財にそれぞれ指定されました。その後、恵解山古墳をはじめ、13基の首長墓が「乙訓古墳群」として、国指定史跡に指定されました。本市域には、魏の皇帝が卑弥呼に贈ったとされる三角縁神獸鏡4面を含む銅鏡や、勾玉が出土した4世紀後半の長法寺南原古墳、及び6世紀前半の井ノ内車塚古墳や井ノ内稲荷塚古墳、巨石を横穴式石室に用いた7世紀前半の今里大塚古墳の計5基が所在します。

その他にも、多種多量の埴輪が見つかった首長墓の塚本古墳、走田古墳群、豊富に玉類が副葬された長法寺七ツ塚古墳群など多様な古墳が分布しています。特に、宇津久志1号墳では国内最古級の重層ガラス玉が出土し、古代ローマ製のローマガラスであったことがわかっています。

一方、古墳時代の人々の暮らしを示す、集落遺跡も数多く所在しています。

雲宮遺跡では、4世紀ごろの水田跡が確認されており、小畑川や犬川流域の微高地に住まいを構え、近くの低地や湿地で耕作していた様子が窺えます。小泉川流域に立地する伊賀寺遺跡では、6世紀ごろの竪穴住居が15棟以上確認され、6世紀後半には今里遺跡や陶器町遺跡で、大型掘立柱建物や総柱建物などが見つかっています。有力者が居住する集落が、各流域で展開していたと考えられています。

続く7世紀には、それまで権力の象徴であった古墳築造にかわって、寺院の造営が開始されました。本市域では北部で乙訓寺、南部で鞆岡廃寺の2つの古代寺院が知られます。乙訓寺は、郡名を用いることから乙訓地方でも中心的な寺院であったと考えられています。後に、延暦4年(785)には桓武天皇の弟、早良親王が藤原種継暗殺の首謀者として幽閉され、弘仁2年(811)には嵯峨天皇によって空海が別当として入寺、修造にあたり、翌年には最澄が訪れたことでも知られます。また、発掘調査によって、7世紀後半の軒瓦や長岡京時代の講堂跡や門跡などが見つかり、境内北東部には乙訓寺の瓦を焼いた窯跡も確認されています。鞆岡廃寺は山陽道、後の西国街道と丹波街道との分岐点に立地し、長岡京の南の玄関口に位置します。四天王寺(大阪市天王寺区)と同型の瓦が出土しており、乙訓地方最古級の寺院とされています。長岡京時代に盛行しますが、平安京遷都後まもなく廃絶したと考えられています。

これらの古墳や遺跡には、恵解山古墳公園や今里大塚古墳公園、七ツ塚公園のように公園として整備したもの、走田9号墳のように民有地で公開されているものもあります。また、発掘調査による出土遺物・調査成果について

- 中央政権の縮図、乙訓古墳群
- 古代人の営みを伝える集落跡



恵解山古墳公園



今里大塚古墳公園

は、長岡京市立埋蔵文化財調査センターで保管・公開されており、「大王の息吹」の歴史文化を今に伝えています。

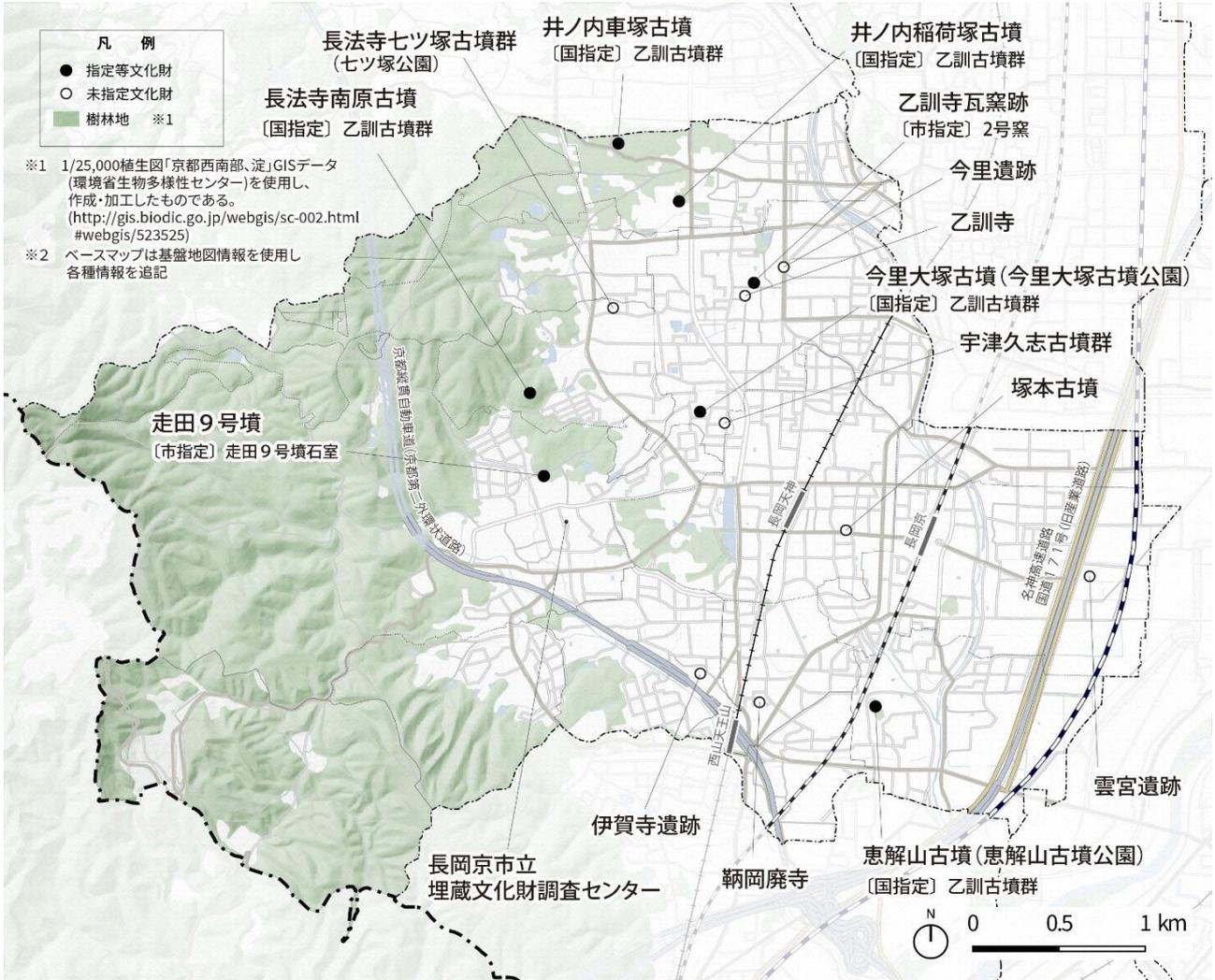


図4-3 「大王の息吹」に関連する文化財の位置図

名称	概要
● 長法寺南原古墳	4世紀後半の前方後方墳。
● 恵解山古墳	5世紀前半の前方後円墳。全長128mで乙訓地方最大。鉄器埋納施設をもつ。
● 井ノ内車塚古墳	6世紀前半の前方後円墳。
● 井ノ内稲荷塚古墳	6世紀前半、井ノ内車塚古墳に続く前方後円墳。横穴式石室をもつ。
● 今里大塚古墳	7世紀前半、最後に築造された大型古墳。
○ 長法寺七ツ塚古墳群	6世紀中頃、7基で構成される古墳群。
○ 塚本古墳	6世紀初頭の前方後円墳。
○ 宇津久志古墳群	5世紀前半、一辺6mの方墳2基からなる古墳群。
● 走田古墳群	6世紀、10基の群集墳で構成される古墳群。
○ 雲宮遺跡	集落跡。4世紀ころの水田跡を確認。稲作に関わる遺物が多く出土する。
○ 伊賀寺遺跡	集落跡。6世紀ころの竪穴住居を15棟以上確認。有力者の集落とされる。
○ 今里遺跡	集落跡。6世紀後半の大型掘立柱建物を確認。有力者の集落とされる。旧石器時代のナイフ形石器も出土している。
○ 乙訓寺	7世紀の創建との寺伝がある。乙訓地方の中心的な古代寺院とされる。
● 乙訓寺瓦窯	乙訓寺の北東で確認された窯跡。乙訓寺の瓦を焼いた。
○ 鞆岡廃寺	7世紀初頭の創建と推定される。乙訓地方最古級の寺院とされる。

●:指定等文化財 ○:未指定文化財

### (3)ここがみやこ！「長岡京」王城の地

## 長岡京王城

3



- 基盤状街区とその遺構
- 都の暮らしを伝える出土遺物



長岡京の復元図

長岡京は、桓武天皇によって造営され、延暦3年(784)11月11日に平城京から山背国乙訓郡に遷されたものです。わずか10年間の都でしたが、それまで宮・都が展開していた奈良盆地を離れた長岡京遷都は、新しい時代への幕開けであったとされています。

京域は、現在の向日市・長岡京市・大山崎町・京都市の一部からなり、東西4.3km・南北5.2kmに及びます。都のなかには、朱雀大路をメインストリートに、幅24mの大路と幅9mの小路によって碁盤目状に整備され、西側は右京、東側は左京と呼ばれました。本市域では北は二条大路から、南は八条大路までの道路が確認されており、現在の長岡京市役所南側の東西道路は、おおよそ五条大路にあたります。道路に囲まれた区域は「町」と呼ばれ、官庁や身分に応じた居住地が割り当てられました。発掘調査によって、建物跡や井戸、土器や漆器、木簡、四仙騎獣八稜鏡など、当時の生活・生産に関わる遺構・遺物が確認されています。また、「蘇民将来」呪符木簡や墨書人面土器、土馬などからは祈りや儀式の様子を窺い知ることができ、京域の南西辺、境界に位置する西山田遺跡では大規模な祭祀跡も確認されています。都の造営には、平城京や難波宮を解体して運び込まれた部材が多く利用されました。それだけでなく、谷田瓦窯群では新様式の瓦を生産しており、主要な施設に用いられました。古代寺院として知られる乙訓寺・鞆岡廃寺も、「京下の七寺」として都のなかに組み込まれたとされています。

ところが、2度の大洪水や桓武天皇の弟、早良親王の死、その怨霊などが問題となったのか、新しい都として平安京が造営され、延暦13年(794)10月22日に遷都し、長岡京は廃されました。主な建物は解体、移されてやがてかつての様子はわからなくなり、都市近郊の農村風景が広がることとなります。いつしか

桓武天皇の年譜

年代	主な事項
天平9年(737)	誕生。山部王と命名される。
宝亀4年(773)	1月、山部親王が皇太子となる。
天応元年(781)	4月、山部親王が即位【桓武天皇】し、弟の早良親王が皇太子となる。
延暦3年(784)	5月、摂津職から蝦蟇2万匹が四天王寺に移動したことの報告【長岡京市遷都のまえぶれ】。 6月、造長岡宮使に藤原種継らを任命し、都城・宮殿の造営を開始する。 11月11日、天皇が長岡京に遷る【長岡京遷都】。
4年(785)	9月、藤原種継が暗殺される。早良皇太子を廃し乙訓寺へ幽閉する。
5年(786)	5月、左・右京および東・西の市人に物を賜う。7月、太政官院(朝堂院)が完成する。
6年(787)	10月、「水陸の便なるをもって都をこの邑に遷す」の詔。
7年(788)	9月、「水陸の便あつて都を長岡に建つ」の詔。
8年(789)	2月、天皇、西宮から東宮に移る。12月、皇太后高野新笠が死去する【蝦夷攻め】。
9年(790)	3月、皇后藤原乙牟婁が死去する。7月、京下七寺で皇太子病氣平癒の誦經を行わせる。
10年(791)	4月、山背国内の諸寺の塔を修理する。9月、平城京の諸門を解体し長岡宮に移建する。
11年(792)	6月、早良親王の霊を慰める。8月、大雨で桂川等あふれる。桓武天皇が赤目崎にて視察。
12年(793)	1月、宮を解体するため桓武天皇が東院に移る。
13年(794)	7月、東・西の市を新京に移す。 10月22日、天皇が新京へ遷る【平安京遷都】。11月、山背国を山城国と称す。
14年(795)	1月、旧長岡京の地8町を勅旨所の藍園、近衛府の蓮池にあてる【蝦夷攻め】。
16年(797)	8月、山城国府を旧長岡京の南に移す。11月、坂上田村麻呂を征夷大將軍に任命する。
25年(806)	3月、桓武天皇崩御。4月、紀伊郡柏原山陵に葬られる。

「幻の都」と呼ばれるようになった長岡京でしたが、昭和29年(1954)当時高校教員で本市出身の中山修一氏らによって発掘調査が開始され、翌年長岡宮朝堂院南門跡(向日市鶏冠井町)が発見されました。これを皮切りに、現在までに長岡京の発掘調査は2,400回を超え、平成22年(2010)には長岡京発掘2,000回を記念して、石碑「長岡京発見之地」が建立されました。建立地は、同氏の「長岡京」発見のきっかけとなった田地や発見当時の住まいに程近い、JR長岡京駅前交差点が選ばれました。また、同氏の生家は一部が長岡京市に寄付され、その足跡と発掘調査の成果が一目でわかる施設として整備され、平成14年(2002)「中山修一記念館」が開館しました。

なお、「水陸の便なるをもって都をこの邑(長岡)に遷す」として、この地に造営された長岡京でしたが、それ以前にも本市域には、弟国宮が所在していたことも知られています。弟国宮は、継体12年(518)継体天皇によって遷都されたもので、所在地は確定していませんが、本市域北部が候補地とされています。

長岡京跡の整然と造成された街区は、都として十分に整えられていた情景を思い起こさせ、遠隔地から運ばれ

てきた土器や荷札木簡などの出土遺物は、列島各地からやってきた多くの人々で賑わう様子を想像させます。発掘調査の成果からよみがえる長岡京の姿は、桓武天皇が造営した「王城の地」の歴史文化を示しています。

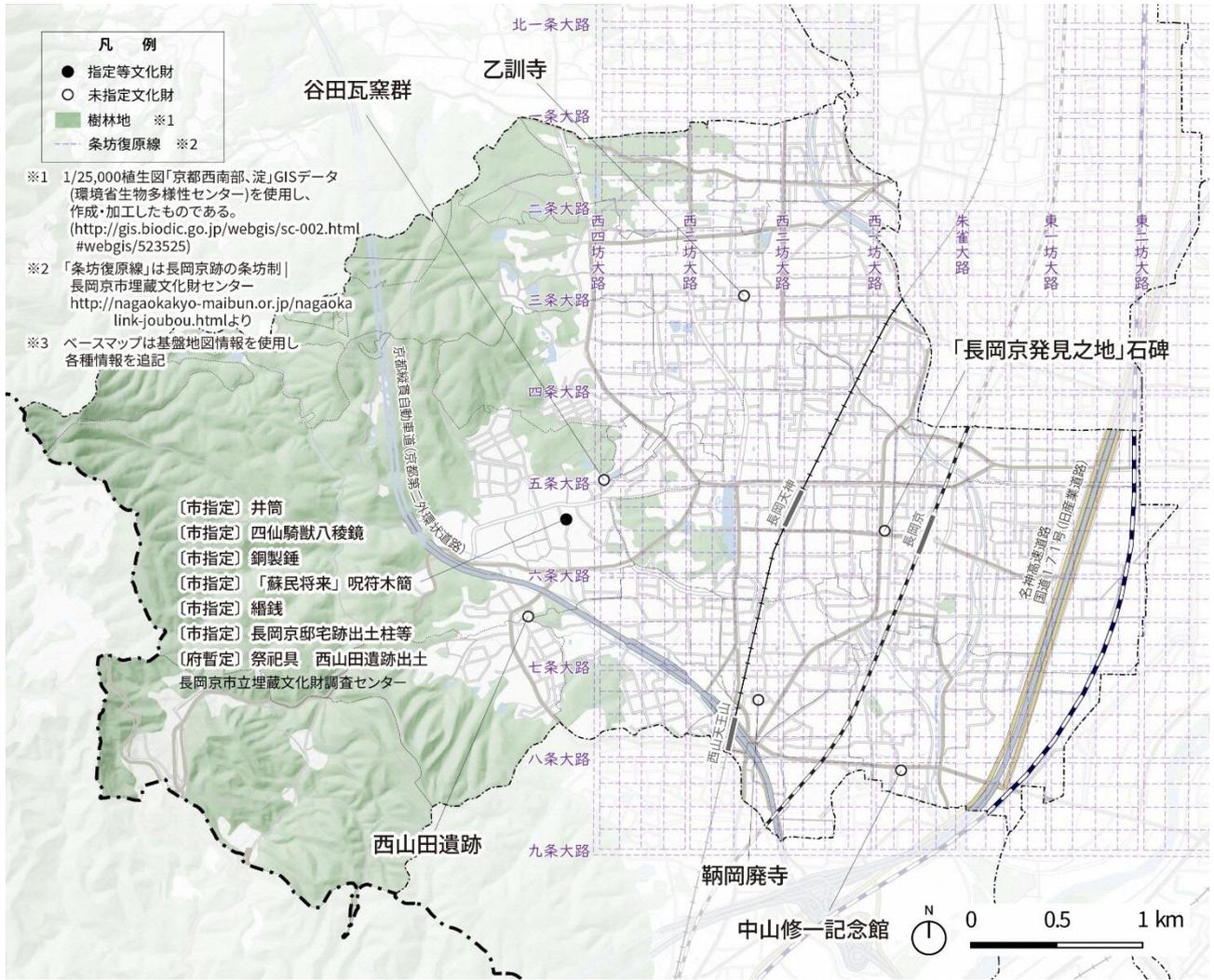


図4-4 「王城の地」に関する文化財の位置図

名称	概要
● 井筒	右京六条一坊三町から出土した、最高級の井戸。
● 四仙騎獣八稜鏡	左京七条二坊七町、東市推定地から出土した銅鏡。
● 銅製錘	左京六条三坊二町から出土した、棹杵で使われる錘と考えられている。
● 「蘇民将来」呪符木簡	右京六条条間南小路の北側溝から出土した木札。
● 緋銭	右京四条三坊九町から出土。和同開珎・万年通宝・神功開宝計 72 枚を綴じたもの。中・近世に多く見られる形態だが、古代では類例が少ない。
● 長岡京邸宅跡出土柱等	右京二条三坊二町から出土。京域では最大級の建物で、柱 9 本・礎板 4 枚・軒丸瓦 3 点・瓦片 10 点からなる。
● 祭祀具 西山田遺跡出土	土馬 93 点・ミニチュア竈 100 個体・墨書人面土器 30 点以上からなる。京城南西で行われた、大祓のものと考えられている。
○ 谷田瓦窯群	長岡宮の建物等に葺いた瓦を焼いた瓦窯群。
○ 乙訓寺	京下七寺の一つと考えられている。早良親王幽閉の地。
○ 鞍岡廃寺	京下七寺の一つと考えられている。長岡京時代に、大規模な修理が行われたことが知られる。
○ 「長岡京発見之地」石碑	中山修一氏による「長岡京」発見のきっかけとなった場所。

●:指定等文化財 ○:未指定文化財

#### (4) 幽閑とにぎわい！信仰と遊観の地

信仰と  
遊観の地

4 冊

西山とその麓に広がる本市域には、古代寺院として乙訓寺と鞆岡廃寺が知られますが、それ以降も各時代の信仰によって寺院や神社が造立されています。京都に程近く、各宗派の布教活動の影響がいち早く及ぶため、天皇家・公家・武家による大伽藍から、遁世者の小さな庵まで、さまざまな堂舎が営まれるとともに、それぞれ衰退・再興・興隆が繰り返されました。

- 洛外西山とその麓に広がる信仰
- 都名所図会等に描かれた風景

信仰の展開は、建造物や古文書類とは異なり、信仰の対象として戦乱を避けて守られてきた、仏像や仏画などの伝来とその分布によって跡づけられています。それによると、西山一帯には平安・鎌倉時代を通じて、日本固有の信仰と習合した観音信仰・薬師信仰が伝播していました。大同元年(806)、京都東山の清水寺の開祖延鎮が柳谷で楊谷寺を創立したといい、山岳信仰に基づく観音信仰、特に清水寺観音信仰が京都を迂回して南伝しました。また、道雄が華嚴宗の道場を開くため、海印寺十院を創立しており、嘉祥4年(851)官寺に準じる定額寺となっています。その後、鎌倉時代後期には東大寺僧の遊字隠遁の地として栄えたことが知られ、南都六宗の北上を示しています。一方、平安時代に興隆した密教では、まず真言宗が教線を伸ばしました。大同元年、空海が勝龍寺を創立したといい、数年後の弘仁2年(812)には乙訓寺に入り、別当として修理にあたっています。また、承平元年(931)に死去した宇多天皇が住んだという開田院は、仁和寺の院家で「遠所の別院」と呼ばれました。天台宗の進出はやや遅れたようです。

鎌倉時代、大きく教線を広げたのが、法然開創の浄土宗です。光明寺は、法然を茶毘に付した廟所から興った、西山派証空の拠点の一つです。この地は、かつて法然が一時住んだゆかりの場所ですが、「光明寺縁起絵巻」によると、法然の弟子となった熊谷直実(蓮生)の念仏三昧院がその前身といえます。この絵巻には、洛外に「幽閑の地」を求める蓮生に対して、法然が粟生野の奥の地を勧めたとするエピソードも描かれており、各宗派が展開した当時の西山一帯、また京都から見た乙訓地方の環境をよく表しています。こうした地理にあったためか、天福元年(1233)承久の乱で配流となり死去した、土御門天皇の遺骨を安置し、菩提を弔う金原御堂が造立されています。中世は、武家の信仰として禅宗が普及した時代でもありましたが、本市域では乙訓寺が南禅寺大學院の末寺となり、法皇寺として存続しました。

戦国の争乱のなかで、京都近郊に位置する本市域の寺社も、その多くが兵火に罹って荒廃したと考えられています。勝龍寺は、室町幕府将軍の石清水八幡宮社参における人夫の集合場所とされ、守護勢力の拠点となっています。また、豊臣秀吉の側近に宛てたと思われる、海印寺十院の一つ寂照院と光明寺との連名による復興の助成を求めた言上書から、その一端を窺い知ることができます。江戸時代になり、平和の訪れとともに新しい権力者や民衆と結びつき、後に中興の祖と仰がれる住持を中心に、それぞれ多様なたちで復興が図られました。本市域の寺社に伝わる什物の紀年銘や修理銘から、おおよそ17世紀半ばから18世紀の初めにかけて整備されていった様子が見て取れます。再興された境内周辺の景観は、江戸時代中期の絵入り名所地誌、『都名所図会』などに描かれ、信仰の場であるとともに、人々が景勝を楽しむ遊観の地として多くの参詣者が訪れるようになりました。また、復興費用をまかなうため、特定の日に秘仏や寺宝を公開する開帳がたびたび催されました。光明寺では自寺での居開帳だけでなく、京都・大坂・江戸に出張した出開帳がよく知られ、乙訓寺・楊谷寺でも元禄年間(1688~1703)以降33年毎の開帳が定着しました。長岡天満宮では、元禄15年(1702)の菅原道真800年遠忌を契機として、50年毎に万灯会が催されるようになり、名声を高めました。享保11年(1726)、1日の参詣で万日分の功德が得られるとする法会、万日回向が光明寺で催されましたが、京都方面からの通路となる井ノ内では、小畑川に架かる従来の板橋に加え、新たに土橋を掛けてそれに備えました。この土橋では、1人1文ずつ通行料が徴収され、7日間で22貫300文が集まったと記録されています。延べ2万3,000人が渡った計算となり、多くの参詣者で賑わったことがわかります。

幕末動乱と続く明治維新によって、本市域の寺社も大きな再編・変容を余儀なくされましたが、長岡天満宮は桂宮の庇護を離れて開田の氏神として再出発が図られ、存続の危機を乗り切りました。その後、「長岡公園」を増築して「神威を戴き京阪及びその他汎々公衆の快樂地と為すべく、新たな名勝保存・社観整備の動きへと発展していくこととなります。楊谷寺も、向日町・山崎・高槻などの鉄道駅から参詣者を呼ぶための柳谷道の改修や、実

現には至らなかったものの、大正末年の登山鉄道敷設計画が知られます。また、庶民に普及していた西国三十三所巡礼になぞらえて、西岡三十三所巡礼や法然上人二十五霊場、菅公聖蹟二十五拜などの巡礼が考案されました。

現在、本市域の寺社は乙訓寺の牡丹や楊谷寺のあじさい、寂照院のモウソウチク林、光明寺の紅葉、長岡天満宮のクリシマツツジ・桜並木・梅園など、四季折々の草花でも親しまれています。今も多くの人々を惹きつける寺社と、その歴史のなかで育まれた景観は「信仰と遊観の地」の歴史文化を表しています。

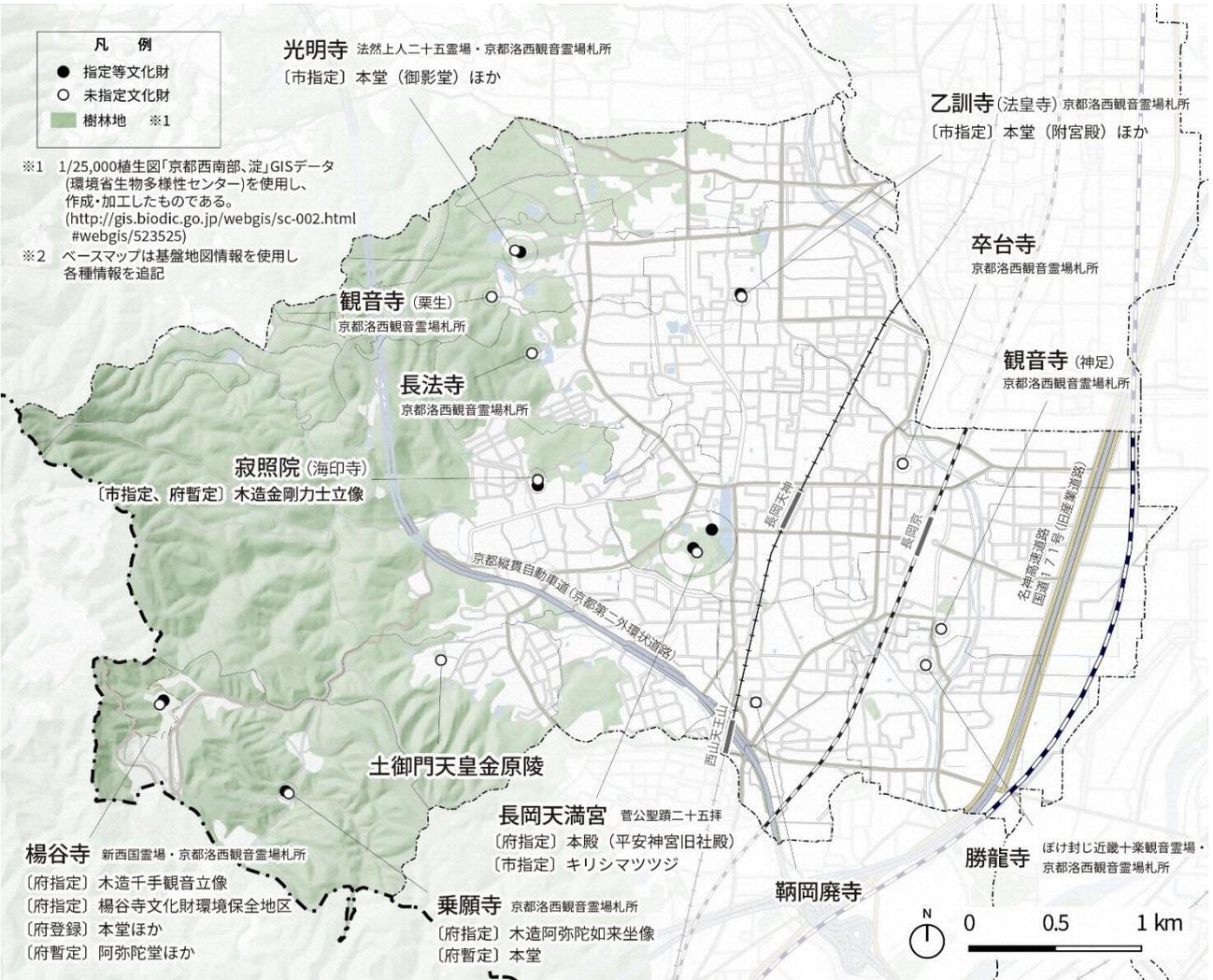


図4-5 「信仰と遊観の地」に関する文化財の位置図

名称	概要
● 楊谷寺	江戸時代の初め、芳室土奎が再興。量空是海の活躍によって、元禄年間(1688~1703)以降皇室の帰依を得るようになる。
● 寂照院	海印寺十院の一つ。室町時代後期、『実隆公記』にある病氣平癒の霊験についての記事から、庶民の信仰を集めていた様子が垣間見える。
● 勝龍寺	空海が、唐長安で学んだ青龍寺に因んで開基し、応和2年(962)千観の祈雨の効験によって勝龍寺へ改称したという。
● 乙訓寺	元禄年間、護持院隆光の尽力と江戸幕府將軍徳川綱吉・その生母桂昌院の援助によって、真言宗寺院として再興される。
● 光明寺	西山浄土宗の総本山。中興の祖と仰がれる倍山俊意によって、法然の廟所をはじめ伽藍の整備や壇林の復興が図られた。
○ 土御門天皇金原陵	鎌倉時代の土御門天皇の陵墓。金原御堂、のちに金原寺とも呼ばれた寺院があった。
● 長岡天満宮	江戸時代の初め、八条宮(のち桂宮)によって山荘、「茶屋」が造営される。元禄年間、霊元天皇によって再興、境内が整備されて、現在みられる景観の原形が整えられた。

●:指定等文化財 ○:未指定文化財

## (5)自治と戦乱の舞台！西岡衆と細川藤孝

## 戦乱の舞台

5



- 西岡衆による自治、乙訓惣国
- 細川藤孝の西岡支配と勝龍寺城

西岡衆は、西岡を拠点とした、神足氏をはじめ馬場氏・古市氏・林氏・中小路氏・高橋氏・能勢氏・井内氏(本市)、革嶋氏(京都市西京区)、野田氏・物集女氏・鶏冠井氏(向日市)、寒川氏(京都市南区)などの国人・土豪・地侍といった在地の領主層で、江戸時代前期の地誌『雍州府志』で上野城跡の項目に記載される「西郊三十六人家」が、当時伝承されていた西岡衆を指すと考えられています。彼らは、村落では村の代表者として、また史料によって室町幕府の御家人や有力大名の被官人、徳政一揆を率いる指導者、地域紛争の仲介人、荘園の現地管理者として、その活動が跡づけられます。

西岡衆が居館を構えた西岡とは、14世紀中頃以降一般に使用された広域地名で、現在の本市と向日市の全域、大山崎町、京都市南区・西京区・伏見区の一部からなり、桂川から向日丘陵、西山山地の麓までの範囲を指します。その北東部は、桂川から引いた灌漑用水、今井の共同管理を契機として、西岡11ヶ郷と呼ばれる連合体を構成したことが知られますが、西岡はこうした村々相互の連帯による、地理的・歴史的なまとまりを示すものです。

応仁・文明の乱(1467-77)で東西両陣営にわかれたように、西岡衆はそれぞれ自律性が高く、時には同族であっても分属して争いましたが、戦後処理にかかる外部勢力進出の企てに直面し、結合します。それは、西岡の村々連合を背景に、日常的な合力関係のなかで培われ、長享元年(1487)と明応7年(1498)の二度にわたる、乙訓惣国として立ち現れました。乙訓郡の国人領主らは、それぞれの主従関係や応仁・文明の乱での敵対関係を乗り越え、連帯の精神的な支えとして向日宮(現在の向日神社)に結集し、談合を重ねました。ともに活動し、東寺(京都市)をはじめとする荘園領主から必要経費を捻出させ、「国持ち」として自らの手による乙訓郡の支配を目指しました。彼らによる自治が、どこまで達成されたかは、評価によって一定していませんが、長享元年では他国武士の入部を阻止し、明応7年でも守護勢力の介入を退けたようです。地域的な連帯によって地域の安定と平和を獲得しようとした乙訓惣国の活動は、同時期に宇治平等院で集会を開き、南山城3郡で対陣・抗争していた有力大名を追放、守護の支配を排除し、選挙で選ばれた国人領主らが行政・警備の一切を担う自治を、8年間にわたって実現した山城国一揆と対比され、本市域だけでなく、日本中世の歴史を語る上でも欠かせないものです。

本市域には、こうした西岡衆の中世城館が分布しており、所在が確実なものとして、神足城・開田城・今里城の城跡が知られています。勝龍寺城は西岡衆の居城ではなくその前身、寺院の勝龍寺が守護勢力の拠点として、石清水八幡宮に社参する室町幕府将軍警固人夫の集合場所とされたり、応仁・文明の乱で「陣城」に用いられました。その後、室町幕府・細川氏・三好氏及びその家臣ら、それぞれに付き従った西岡衆による権力闘争のなかで、次第に恒常的な城郭、勝龍寺城が築造され、西岡衆の結集核として機能しました。勝龍寺城を、織豊系城郭に大きく造り替えたのが、織田信長の支援を受けて上洛を果たし、将軍となった足利義昭の側近、細川藤孝(幽斎)です。

細川藤孝は、永禄12年(1569)正月には勝龍寺城に進駐したことが知られ、程なく居城とします。藤孝は信長へ接近していくなかで、信長から元亀2年(1571)西岡へ普請役を課して勝龍寺城を要塞化するよう命令を受けましたが、昭和63年(1988)の公園整備に先立つ発掘調査によって、転用石材を使用した石垣の構築や天守・瓦葺きの導入、礎石建物の建築が明らかになっており、当時先駆的な城郭であったことがわかっています。また、平成26年(2014)神足公園の整備にともなう発掘調査で確認された大規模な土塁・空堀跡は、江戸時代中期に編さんされた熊本細川家の家史『綿考輯録』に記載される、要塞化に関連する「米田家記」の内容から、勝龍寺城の改修に合わせて築造されたものと考えられています。加えて、発掘調査では築造に際して、それまでであった神足城のものと思われる土塁・空堀を取り込むかたちで形成していたこともわかりました。なお、『綿考輯録』には明智光秀の娘、玉(のちのガラシャ)と藤孝の子息、忠興との婚儀の記事もあり、天正6年(1578)勝龍寺城で執り行われ



開田城跡土塁



勝龍寺城土塁・空堀跡

たとされています。

藤孝は、信長から委ねられた一職支配をてこに西岡の統治を進めましたが、天正8年(1580)細川家に編成された西岡衆の一部とともに、丹後に移封されることになりました。勝龍寺城では、連歌や和歌、古典講釈や古典書写、能楽、囲碁など藤孝の文化的な活動も確認され、天目茶碗や茶釜なども出土しており、京都への玄関口に位置した本市域には、戦国争乱から天下統一に至る歴史文化が色濃く残されています。

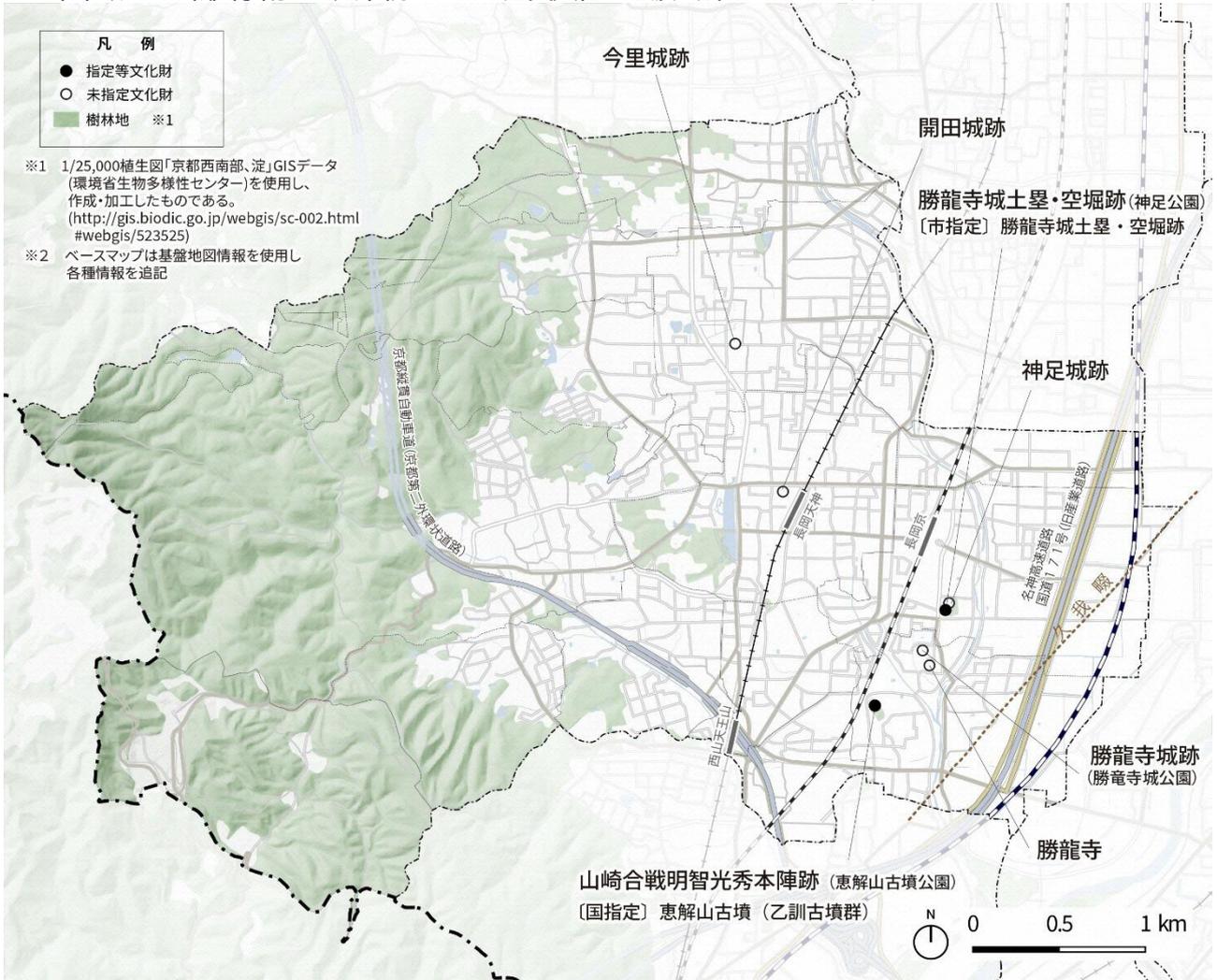


図4-6 「西岡衆と細川藤孝」に関連する文化財の位置図

名称	概要
○ 神足城跡	神足氏の館城と考えられている。勝龍寺城の北東に位置し、細川藤孝による勝龍寺城の改修の際に、外郭線に取り込まれたと考えられている。小塩荘の政所として機能していたと考えられ、永正2年(1505)には領主で関白も務めた公家、九条政基が直務のため駐在し、記録を残した。このころのものと思われる「勝龍寺近隣指図」が九条家に伝わり、「城神足入口」等の注記がある。
○ 開田城跡	中小路氏の館城と伝えられる。15世紀後半から16世紀前半に築造されたと考えられている。土塁の一部が保存・復元されている。
○ 今里城跡	能勢氏の館城と考えられている。発掘調査で「ひこ五郎」・「大永二」と墨書のある木札が出土したが、領主九条家に伝世した大永2年(1522)「山城國小塩庄帳」に、「のせひこ五郎」との記載があり、同一人物と推測されている。
○ 勝龍寺城跡	守護勢力の拠点となっていた勝龍寺が次第に城塞化、元龜2年(1571)細川藤孝によって当時先駆的な織豊系城郭に改修された。
● 勝龍寺城土塁・空堀跡	勝龍寺城の北側を守る外郭線。一部が保存・復元されている。
● 山崎合戦明智光秀本陣跡候補地・恵解山古墳(乙訓古墳群)	本能寺の変後、豊臣秀吉と明智光秀による山崎合戦で、光秀の本陣が置かれた可能性がある。

●:指定等文化財 ○:未指定文化財

## (6) 京都の繁栄を支えた！京都近郊農村の暮らし

京都近郊  
農村

6



- 京都郊外の地域的・歴史的特徴
- 伝統行事・食文化・農産物などに見る豊かな暮らし

本市域における人々の営みのはじまりは、約2～3万年前から約1万2千年前に遡り、京都府内最古級の南粟ヶ塚遺跡や裕遺跡・今里遺跡などでその痕跡が確認されています。弥生時代、本格的な農耕が開始されますが、稲作の始まりを示す京都府最古の遺跡として、雲宮遺跡がよく知られています。古代、8世紀末の長岡京造営によって、本市域は一時政治・経済・文化の中心地となりますが、その後は都市京都の近郊農村として推移していくことになりました。

本市域には、都の貴族や寺社が領有する鞍岡荘や調子荘、開田荘、小塩荘といった荘園が設けられ、京都の経済を支えました。特に、古市・神足は乙訓全域に分布した散在型荘園、小塩荘の現地管理拠点としてたびたび史料にあらわれます。神足氏はその現地管理者で、同氏が拠った神足城には小塩荘の領主で関白も務めた公家、九条政基が駐在して当時の様子を記録しています。また、調子荘は平安時代後期には近衛府の下級官人を世襲した下毛野氏に連なるとい、調子氏の本拠地です。調子氏を名乗るようになった南北朝時代以降も領主として在住し、江戸時代を通じて調子から京都へ出勤して撰閣家の側近くに仕え、朝廷の儀式に供奉しました。一方で、中世は康永3年(1344)の寂照院金剛力士立像造立にかかる結縁交名から窺えるように、現在の各地区に繋がる村落が成立した時代でもありました。



奥海印寺の農地景観  
(景観百選最優秀賞「棚田と鎮守の森」)

応仁・文明の乱にはじまる戦国時代、京都をめぐる攻防によって荒廃した本市域でしたが、近世に入って平和が訪れるとともに、江戸幕府による支配が浸透します。それは、幕府の統括のもと、各地の大名がその領国を支配する幕藩体制でしたが、京都近郊なかでも乙訓地方は、一般とは異なる様相を見せました。幕府領・旗本領に加え、京都の禁裏方の所領や宮家領、公家領、寺社領が数多く設定されたことによるもので、本市域に所在した15ヶ村の多くが、これらの所領が複雑に入り組む相給村でした。

戦乱に荒らされることなくなくなった農地では、用水確保による水田耕作が発展し、山野の管理も進みました。八条ヶ池のほか、儀仗(議定)池・放生池やナンマンダ池などが造成されました。今井用水は、大原野上里(京都市西京区)を水源とし、小畑川の西を平行して流れる人工の水路です。その起源は中世に遡りますが、今里の田地3分の1に水がかかる重要な用水として、江戸時代を通じて大切に維持、管理されました。山野は、煮炊きなどに使う燃料や肥料となる下草の供給地として、生活・生産に欠かせないものでした。加えて、奥海印寺と長法寺の両村が共同利用した、入会の野山では石灰や松茸も採れました。柳谷・浄土谷で収穫されたヤマモモ(楊梅)や松茸は、領主の仙洞御所へも献上されています。こうして、本市域には米麦を中心に野菜や菜種、タケノコなどを栽培し、農間余業にも携わることができる、豊かな農村地帯が形成されました。その経営は、野菜をはじめ商品作物の多くを京都へ出荷し、その帰りに下肥を運び込んだ、多肥多収によって成り立っていました。京都は、近世を通じて人口40万人を擁する大都市でしたが、周辺農村の農業生産の進展と商品作物の増大・多様化は、そこで生み出される下肥の需要を高め、不足するほどでした。また、近世の本市域では、こうした高い農業生産力を背景に、豊かな地域文化が展開しました。算額(寛政2年(1790)12月今堀直方奉納)だけでなく、光林寺や神足神社などで催された句会で詠まれた秀句を額にし、天保10年(1839)光林寺に奉納した神足社俳句奉納扁額などもそれをよく示しています。江戸時代には行われていた行事として、正月から春にかけて行われた、豊作祈願の祭りであるオコナイや、田植えや稲刈りの前後に行われる五穀豊穰を祈ったオセンド(お千度)などが、本市域の各地で見られ、サイマツリ(境祭り)などの境界に関わる行事やさまざまな講組織による行事なども伝わっています。こうした伝統的な行事にともなう、浄土谷のいとこ汁などの食文化も、近年再発見されています。

幕末・明治維新後、鉄道・道路網の整備を契機として、本市域でも近代化が押し進められました。とりわけ昭和戦後、京都や大阪のベッドタウンとして、急速に都市化・住宅開発が進展し、それに従って本市域の農村的な要素は薄れていきました。こうしたなかでも、近世以来の特産、タケノコが「京たけのこ」として売り出されるようになり、ナスや花菜が新たな特産物として創出されて、京野菜ブランドとして出荷されています。京都とその近郊農村は、京都の都市機能を相互に補完し、古くから発展してきました。8世紀末の平安京遷都以降、本市域はその近郊農村として、京都の公家や寺社、武家、町人の暮らしと切り離しがたく結びついた日常生活が営まれました。西山や山麓に広がる森林・農地、ため池・用

水路といった水に関わる文化財、江戸時代から続く伝統行事や食文化、特産物などは京都を支え、ともに歩んだ「京都近郊農村の暮らし」を継承したものといえます。



図4-7 「京都近郊農村の暮らし」に関連する文化財の位置図

名称	概要
○ 南栗ヶ塚遺跡	集落跡。旧石器時代のサヌカイト石片の接合資料を確認。石器作りが窺える。
○ 碓遺跡	集落跡。旧石器時代のナイフ形石器を確認。
○ 今井用水	井ノ内の領内を通り越して、今里の田地を潤した水路。
○ 九左衛門の供養塔	今井用水を引いたと伝わる今里の義民、今井九左衛門の墓といわれる。
○ 儀仗池・放生池・マンポ	今里西側田地の灌漑のために造られた、ため池とトンネル。
○ 野山	江戸時代には「奥山」と呼ばれ、奥海印寺と長法寺が共同利用した入会山。
○ 柳谷・浄土谷	西は大阪府境、南東は天王山に連なる山間盆地。かつて神足の入会山もあった。
● 算額	京都の中根流を学ぶ12歳の少年が寛政2年(1790)長岡天満宮に絵馬として奉納。
○ 神足社俳句奉納扁額	安永4年(1775)・文化5年(1808)・天保10年の3枚からなる扁額。
○ 久貝のおコナイ	西光寺で行われる、小倉神社(大山崎町)を祀るオザ(御座)による豊作祈願の祭り。
○ 今里のヤシャゴ	乙訓寺で行われる、向日神社(向日市)を祀るヤシャゴ(夜叉講)による豊作祈願の祭り。
○ サイマツリ	下海印寺との境界であったと思われる、奥海印寺のサイマツタンという石を祀ったもの。
○ 下海印寺のサカキサシ	4月4日と12月1日に、周辺地区との境界数ヶ所に榊の枝をさしてまわったもの。
○ 長法寺のビシャ	2月17日長法寺で行われる、十二衆と呼ばれた年寄衆による弓射行事。
○ 走田神社の弓講	オセンド当日夕方に行われる、奥海印寺の本座による弓射行事。

●:指定等文化財 ○:未指定文化財

## (7)ピカイチ特産物！竹とタケノコ

乙訓地方と竹材としての竹との関係は古く、平安時代中期には確認されています。竹林に適した気候や地形を活かして良質な竹材を産出し、洛東の山科や洛西の嵯峨と並ぶ主要な供給地として、京都を取り巻く竹の文化を構成してきました。江戸時代には、幕府によって村の支配関係に関わりなく、乙訓地方 102 ヶ村の村々に対して、藪役として竹の上納が課されました。これらは、京都代官小堀家が管理し、二条城の竹蔵に納められて、禁裏や二条城など幕府が管理する施設の補修や竹垣・柵・用水樋、神事祭礼の竹矢来や半屋敷の仕置きなどに使われました。古くなった茶刺分は入札によって払い下げられましたが、商品としての竹材も活発に流通し、竹筏流しによって、京都だけでなく大坂へも出荷されたことが知られます。

一方、乙訓地方のタケノコについては、古くから食されたことが容易に想像されますが、はっきりと史料にあらわれるのは比較的新しく、19 世紀以降です。ここでの竹種は不明ですが、天保 13 年(1842)にはモウソウチクのタケノコの本格的な栽培が跡づけられ、米作よりも利益が大きく、大流行した様子がわかります。ところが、明治 10 年代になると生産の増加に比して販路が狭く、値崩れを起こします。加えて、モウソウチクのタケノコ畑が明治 9 年(1876)の地租改正で地目が畑とされたこと、タケノコが同 14 年(1881)からのコレラ流行時に、消化しにくい食品として需要が落ち込んだこともあってか、当時輸出品として脚光を浴び、国策として奨励されていた製茶にとって代わられました。しかし、この衰運を嘆いた仲買商三浦芳次郎(大山崎町円明寺)が、鉄道輸送を利用した販路を開拓、さらに発展して、竹材の産出とともに盛況を迎えます。これは、本市域の動向とも重なり、大正期に竹材の産出・タケノコの生産は活況を呈し、地域経済の一翼を担いました。

しかし戦後、高度経済成長期を迎え、乙訓地方ひいては京都府のタケノコ畑がその面積を大きく減少させていきます。昭和 35 年(1960)と平成 2 年(1990)とを比較すると、乙訓地方では 28.5%、京都府全域では 33.4%にあたるタケノコ畑がその姿を消しました。特に、有力産地の一つ大枝(京都市西京区)は、洛西ニュータウンの造成によって 66.2%ものタケノコ畑を喪失したことが知られます。こうしたなか、本市域のタケノコ畑は 1.8%の減少にとどまるもので、急速な都市化・住宅開発においても、これを維持・保全したことで、かえって本市域に所在するタケノコ畑は乙訓地方のほぼ半分を擁することとなり、また乙訓に分布するそれは京都府のほぼ半分を占めることになりました。本市域はタケノコの産地として、乙訓地方ひいては京都府におけるその重要性を高めたといえ、今日でもなお、タケノコは特産物としての地位を保つに至っています。

また、本市域では竹・タケノコとの関わりのなかで、さまざまな文化財・歴史文化が生み出されています。まずは、竹・タケノコの生産にかかる栽培用具や栽培技術、タケノコの出荷のための竹籠類とその製作技術が挙げられますが、タケノコを素材とした料理も食文化として位置付けられます。タケノコ栽培用具は、本市域に所在した鍛冶によって製作されており、その製作技術も本市域の歴史文化に欠かせない要素です。栽培技術については、戦後「京都式軟化栽培」と呼ばれるようになる、1年を通じて多くの手間をかける乙訓地方独自の栽培方法で、江戸後期にはその様子が窺え、明治期後半には確立しています。タケノコ畑の景観は、こうした栽培方法によって形成されたものです。竹とタケノコは本市域の地質や地形を基盤に、京都の近郊に立地し、街道や河川、鉄道を通じて大阪にも程近い、地理的な環境とも深く関わる、本市域を代表する歴史文化といえます。

竹と  
タケノコ

7 

● 古代にさかのぼる竹との関係史

● 継承されるタケノコ栽培文化



タケノコ畑



伝統的なタケノコ栽培の様子

出典：長岡京市史 本文編2



収穫されたタケノコ



農家の直売店におけるタケノコの販売

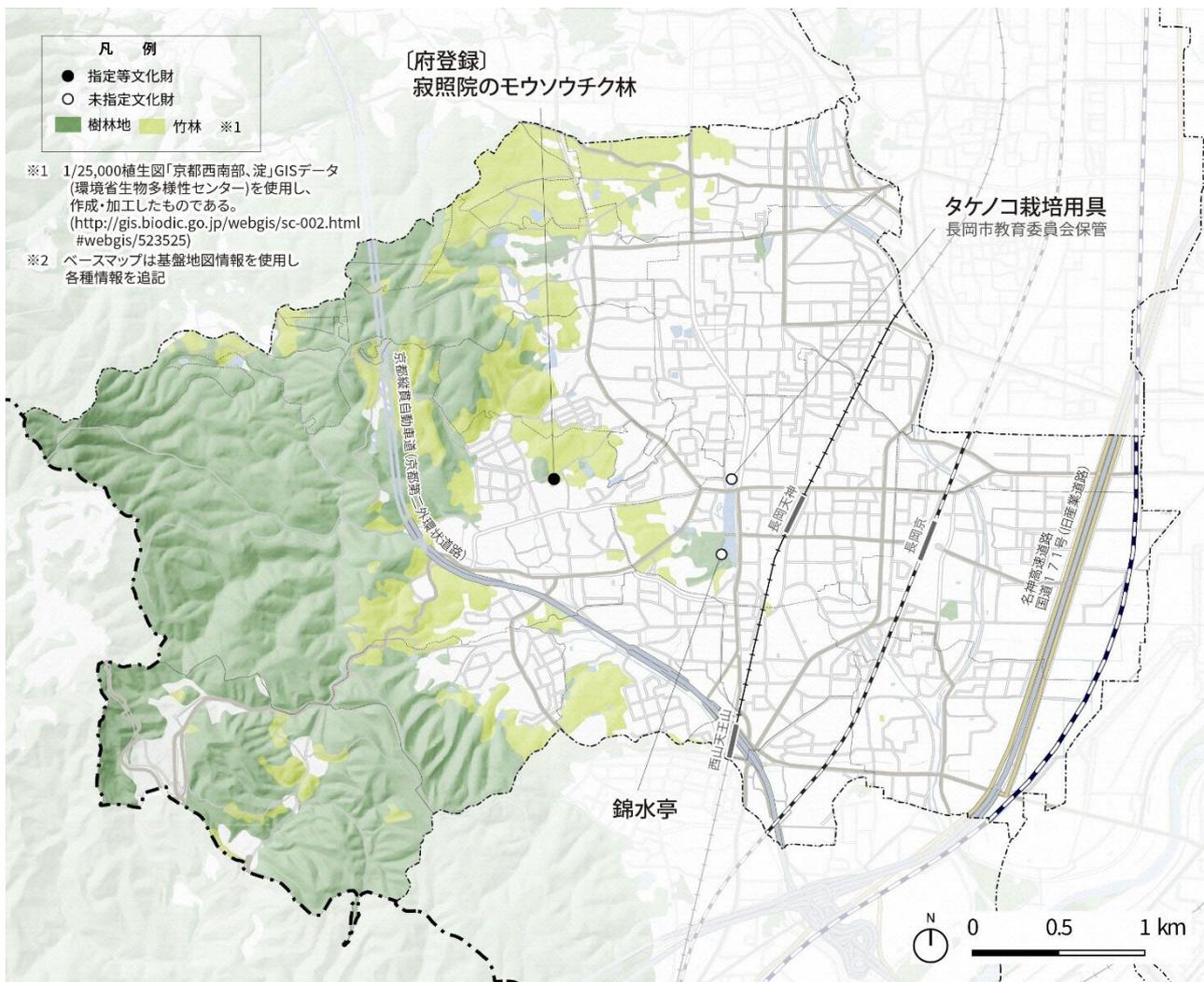


図4-8 「竹とタケノコ」に関連する文化財の位置図

名称	概要
○ 乙訓のタケノコ栽培用具	加茂家による製作。ホリやブチキリ、竹切り鎌からなる。加茂家は、明治期中頃に鍛冶業を開始し、平成に至って廃業した。
● 寂照院のモウソウチク林	寂照院は、9世紀前半に創建された海印寺十院の一つと伝わる。現存する唯一の子院、寂照院の境内東部に残されたモウソウチク林。
○ 孟宗竹の由来	乙訓地方の伝承や寂照院の石碑「孟宗竹発祥之地」に記される寺伝がある。
○ 錦水亭	タケノコ料理で知られる料亭。明治・大正期の数寄屋建築が建ち並ぶ。
○ タケノコ料理	木の芽和えや若竹の吸物、筍のお造り、若竹煮、土佐煮、筍田楽などの伝統的な調理法だけでなく、筍豆腐・筍と車海老の煮物・筍ステーキ・筍饅頭・筍香り揚げ・筍の東寺揚げ・筍シャーベットといった創作料理も見られる。

●:指定等文化財 ○:未指定文化財

表4-1 乙訓地方と竹・タケノコとの関係年表

年代	主な事項
延長5年 (927)	この年完成した古代の法典『延喜式』に、朝廷に納める箸用の竹が、「山城国乙訓園」産出と記される。
11世紀初め	『枕草子』に「鞆岡(友岡)は笹の生いたるがおかしきなり」と見える。
応永23年 (1416)	伏見宮貞成親王の日記『看聞日記』に、西岡の竹商人が登場する。
16世紀	上杉本『洛中洛外図屏風』右隻第三扇』に、西岡の竹売りと思われる行商人が描かれる。
享保2年 (1717)	このころ成立した『京都御役所向大概覚書』に、乙訓一帯に対する竹上納についての規定が記される。納入場所は二条城で、竹蔵に積み上げられた。
天明2年 (1782)	桂宮家家司らによる記録『桂宮日記』に、上納された開田産タケノコが披露され、これを題材に和歌が詠まれたことが記される。
19世紀初め	タケノコの栽培と出荷の記録が、乙訓郡の村々で確認できるようになる。
天保年間 (1830~43)	モウソウチクのタケノコ栽培が急速に普及する。
安政6年 (1859)	大坂青物市場の間屋仲間から西岡郷惣代に、タケノコの出荷を増やすよう依頼がある。
明治9年 (1876)	東海道線が開通し、向日町駅と山崎駅が開業する。
明治10年代	タケノコ生産が一時衰退する。大山崎村の仲買商三浦芳次郎が、淀川舟運に取って替わった鉄道輸送によって、神戸に販路を開拓する。販路の拡張によってタケノコの価格が回復し、生産が再び活発になる。
明治22年 (1889)	江戸時代の15ヶ村が合併し、新神足村・海印寺村・乙訓村の3ヶ村となる。
明治26年 (1893)	三浦芳次郎顕彰碑が、大山崎村円明寺に建立される。
明治30~40年代	タケノコの栽培面積が急増する。戦後、「京都式軟化栽培」といわれる栽培方法が確立する。タケノコの缶詰製造が始まる。
大正7年 (1918)	皇太子(のちの昭和天皇)が、開田でタケノコ掘りの実演を視察する。
昭和9年 (1934)	室戸台風で竹林が大きな被害を受ける。
昭和24年 (1949)	新神足村・海印寺村・乙訓村の3ヶ村が合併し、長岡町となる。
昭和47年 (1972)	長岡町が長岡京市となる。
平成24年 (2012)	寂照院のモウソウチク林が京都府登録天然記念物となる。

参考文献: 長岡京市文化財調査報告書第40冊『京タケノコと鍛冶文化』  
 長岡京市文化財調査報告書第63冊『長岡天満宮資料調査報告書』美術・中世編  
 『乙訓郡誌』